

一方、緊迫の世界からようやく解放された灯里とアリア社長は、安堵の息を漏らした。そして自分の知らないところで藍華とアルが会っていることに、改めて軽い驚きを感じた。やはり灯里も色恋沙汰に多少の興味はあるのだ。自分のこととなると、とんと鈍感ではあるが。

「どうせまたいい雰囲気になると『恥ずかしいセリフ禁止』とか言っているんでしよう」

「そ、それは……」

なおも続くアリスの攻勢。灯里は思わず身を乗り出して二人のやり取りを傍観する。「そんなだからいつまで経ってもまったく進展しないんです」

「……」

ついに藍華は反論の術（すべ）も失い、俯（うつむ）いて肩を縮ませた。

「いつまでも照れを騒いで誤魔化してないで、少しは受け止めたらどうなんですか？」「はい……」

応える声もすっかり小さくなっているが、アリスのお説教は続く。今度はそんなアリスの意外な一面に驚きつつ、その内容に灯里は感心していた。

しかしふと、彼女は気付く。

アリスちゃんも、そんな指南ができるほど恋愛経験があるんだろうか——と。気付きはすれども、決して口には出さないのがあった。

一歩踏み出せば、そのたびに足の下でサク、サク、と小気味よい声で落ち葉が鳴く。歩道は赤や黄色、茶色の斑模様染め上げられ、道行く人々の目と耳を楽ませている。涼しい風が頬をなで、郷愁を誘う枯れ葉の香りが鼻をくすぐる。

「すっかり地上は秋ですね」

少年はゆつくりと深呼吸をし、感嘆をもらした。

屋下がりの太陽は高さも下がりが、すっかり夏の強さは影を潜めている。柔らかに降り注ぐ日差しは穏やかだ。それにもかかわらず、少年はサングラスをかけていた。加えて全身を覆う黒いマント。地重管理人（ノーム）のアルだ。

地下生活を常に行っている彼にとって、地上で季節の移り変わりを肌身に感じることが、もともと手軽に味わえる非日常の喜びの一つだった。

「そうよー。もう実りの秋、真っ只中よ」

彼の隣を寄り添うように藍華は歩く。

二人はそれぞれバスケットを提げている。その中身はシイタケ、えのき、春菊、ニンジンといった秋の野菜に、今が旬の鮭、それに鶏肉。なぜ二人がこれらを抱えているのかというと、晝の思いつきにすべては起因する。

「だいぶ冷えるようになったな……鍋でもするか」

前半と後半のつながりが分るような分からないような、そんな発言に端を発し、晝とウツデー、アルの幼馴染三人に加え、灯里と藍華、アリスまで巻き込んで鍋パーティーをすることになったのだ。

会場の提供は灯里がすることになった。つまり、ARIAカンパニーの二階にあるリビングルームがパーティーの会場である。

場所のセッティングは灯里が主導し、アリスがサポートしている。一方、言いだしつべの晝は鍋とコンロとスプーンの準備、ウツデーは飲み物を用意しており、残ったアルと藍華が——多少の作務的な流れも否めないが——こうして食材の調達に出掛けることとなったのだ。

その買出しも一通り終わり、こうしてのんびりと秋の小道（カッレ）を歩く時間が訪れたのだ。

街は穏やかで、涼しく過ごしやすい。空も適度に雲が浮かび、明るすぎることもない。自然、道を行く人々もいつもより多かった。

「あ、あそこのパン屋さん、酵母を変えたとかで美味しくなったのよ」

「へえ、もともと美味しかったですよ」

「そうなのよ。さらに美味しくってところね。晁さんは『くるみパンはまだまだだ』とか言ってたけど」

街の変化について、談笑を交えてのんびり歩く。アルは地下で生活することが多く、一方の藍華はこの街の観光案内業。自然、二人の会話の多くの部分が、この街についてのことになっていた。

「こっち、こっち！ 早くしろよ」

「待ってよ」

そのとき、二人の横を幼い少年と少女が駆けていった。少年が先んじて走っているが、時折少女を待って足を緩める。

兄妹だろうか。違うとしても、彼らはまだ『恋人』のような概念を持ち合わせてはいないだろう。

その幼い二人を見送ると、視線の先にもう一組の男女がいることに気が付いた。二十代半ばほどの青年と、同じ年の女性。寄り添う二人こそは間違いなく恋人同士だろう。長身の青年に、どこか可愛さを含む綺麗な女性。ドラマを思わせるような理想的な二人。特に交わす言葉が多いわけでもないが、彼らの雰囲気は如実にその關係を表していた。

——果たして、自分たちはどう見えているのだろうか？

友達？ 兄妹？ 外見から見れば姉弟？ そもそも——藍華は自分の肩ほどの高さにある青年の頭を見下ろした——アルは自分と歩くことに不満がありはしないだろうか？ 自分より背の高い女性と歩くことに、コンプレックスを感じないだろうか？